

2 自分タイム

1 「自分タイム」のねらい

生涯学習社会へ移行する現在、自ら進んで学習することの大切さが強調されている。学校教育でも、生涯学び続ける力（自己教育力）を育むという視点で、教育課程を見直し、新たな学習を構築する必要がある。本校では、このような考えに基づき、総合的な学習の一つの領域として、「自分タイム」を創設した。

「自分タイム」とは、子ども一人一人が自らの興味・関心をもとに学習課題を設定し、ゆとりと見通しをもってその課題を追究する活動を楽しむ時間である。活動の中で、子どもたちは、失敗や成功を繰り返しながら、活動そのものへの意味づけを自ら行い、学習することの楽しさや成就感を味わうであろう。このような主体的な追究活動を積み重ねることにより、子どもたちは、学習の仕方を習得し、自分と対象とのかかわり方を見つめ、自分の生活をより豊かにすることができると考えている。

【全体】 自ら設定した課題の追究を楽しみながら、学習の仕方を習得し、自分の生活をより豊かにしようとする子どもを育てる。		
低 学 年	中 学 年	高 学 年
身の回りの問題を見つけ、意欲的に活動しようとする。	自ら課題を設定し、その追究を楽しみながら、学習の仕方を身につけることができる。	見通しをもって自分の課題を追究することを通して、自分の生活をより豊かにしようとする。

2 予想される活動内容

自分タイムの活動で予想される内容としては、次のようなものがある。

- ① 日常生活の中で、興味関心を抱いたもの。
- ② 各教科の学習内容を拡げ、深めていくもの。
- ③ 他の領域の学習内容を拡げ、深めていくもの。
- ④ 宿泊学習に関連したもの。

3 学習過程における基本的な考え方

(1) 学習課題の設定について

学習課題は、従来の教科・領域の枠にとらわれず、日常の生活や学習の中で抱いた疑問や興味・関心をもとにして、子どもたち一人一人が自ら決定するものとして考えている。しかし、子どもたちにとっては、初期の段階から明確な学習課題や計画を立てることは難しいことである。そこで、学年段階に応じて、前年度までの活動事例を紹介したり、作品を鑑賞したりするオリエンテーションの場を設定している。また、相互の学習課題や計画について、学び合う場を設定するようにしている。

(2) 追究活動について

追究活動においては、自分の思いや願いの実現に向けて、子どもたち一人一人が没頭して活動することを大切にしたい。そのため、体験的な活動や調査活動、製作活動など、個に応じて多様な活動が展開されることになる。それに伴って、活動場所も、教室、図書室、運動場、校外の公民館など、諸処に分散されることになる。教職員や保護者、地域の人々、専門機関などとの連携を密接にとりながら、学習活動を支援するためのネットワーク体制を充実させていきたいと考えている。

また、基本的に追究活動は個人によるものであるが、課題や追究方法が類似している場合や集団での活動を要する場合には、共同で追究活動にあたり、情報を交換したり相談したりしながら学習を進めていくこともある。

(3) 表現活動とふりかえりについて

表現のための表現ではなく、表現することを通して、自分の思いが整理され、考えが明確になり、新たな課題の発見につながることを期待して、表現活動を行っていく。最終的には、活動の成果を発表したり作品を展示したりする場の設定を子どもたち自身が望むようになることを期待している。これは、同時に、次年度の活動へのオリエンテーションの場ともなる。また、お互いの課題や追究の質を高め、学習対象をさらに広げることにもつながるものである。

表現活動は、大きな意味でのふりかえりの場と考えることができる。このような大きな意味でのふりかえりの前提として、各学習過程において随時ふりかえることも重視していきたい。ふりかえりを積み重ねていくことで、自分と対象とのかかわり方を見つめながら、自分の考えや判断、行動の質を高めていくことができると考えている。

4 成果と課題

(1) 学習課題の設定について

- 第3学年においては、生活科の学習で行った「ふしぎ発見」が課題づくりの場で生かされており、日頃から疑問に思ったことをためていくことの必要性を感じた。
- 学級や学年で課題一覧を配布したり、掲示したりしたことで多様な課題に気づく子どもも出てきた。
- 課題一覧とともに進行状況を掲示したことで、活動がうまくいっていない子どもが明らかになり、友達や教師の助言がしやすくなった。
- 課題に対する子どもの思いをふくらませ、決めた課題に迫るにはどこまで到達すればよいのかというゴールのイメージをもてるように支援することが大切であるとわかった。
- ▲課題を決める際に、自分タイムに取り組める時間を考えた取り組みになる傾向がある。
「日常の生活や学習の中で抱いた疑問や興味・関心をもとにして、子どもたち一人一人が自ら決定するもの」という自分タイムのねらいからすると時間の枠を越えて取り組んでほしい課題もある。時間の見通しや追究の見通しがもちにくい子どもに、どのように助言したり、手助けしたりするかが課題である。

(2) 追究活動について

- 自分の課題達成にこだわって自分タイムの時間以外に追究活動を進める児童も見られるようになった。
- 表現活動やふり返りの活動を通して、学び方のよさを子ども自身が蓄積していく必要がある。個人ファイルやノートを作ったことはよかった。
- ▲運動のように技能を極める課題は、自分タイムで与えられた時間を超えて継続して取り組むような働きかけが必要である。
- ▲追究活動で深まりや広がりを生み出すための支援をより一層考える必要がある。
- ▲学級や学年単位では、追究の足跡が残っていく取り組みがなされたが、学校全体として共通のファイルに残すなど記録していくことが必要である。
- ▲週休2日が完全実施になったことで、校外に出る活動が組みにくくなった。学校から出て調べたり、体験したりする活動をどのように保障していくかが課題である。

(3) 表現活動とふりかえりについて

- 表現することを通して、自分の思いが整理され、考えが明確になり、新たな課題の発見につながることを期待している。その意味で最後に発表をもつことは重要である。
- ▲中間発表の持ち方を検討していく必要がある。課題の選択がどうであったかをふり返る場は必要であるが、追究活動の途中でそれを設けることについては検討していきたい。

(4) 来年度に向けて

- ▲自分タイムの評価のあり方については、課題設定、追究、表現・ふり返りの各学習活動における規準を明らかにしていきたい。